

中学校

平成 11 年 度

教育研究員研究報告書

外国語 (英語)

東京都教育委員会

平成11年度教育研究員（外国語部会）名簿

男子 9人 女子 5人 計 14人

No.	区市名	学校名	氏名	分科会	備考
1	文京区	文林中学校	遠藤 哲也	2	
2	墨田区	錦糸中学校	長谷川 安男	1	
3	品川区	荏原第一中学校	麴 池 ゆき子	2	◎記録
4	世田谷区	緑丘中学校	菱 沼 省 二	3	
5	板橋区	板橋第二中学校	織 戸 昭 夫	1	
6	練馬区	北町中学校	坪 井 美智子	3	
7	足立区	花保中学校	玉 木 由 美	2	
8	葛飾区	立石中学校	角 田 幸 彦	1	
9	江戸川区	松江第四中学校	江 尻 光 子	1	
10	府中市	府中第四中学校	永 井 信 次	3	◎
11	昭島市	瑞雲中学校	木住野 隆	1	副世話人
12	町田市	武蔵岡中学校	櫻 井 幹 也	3	世話人
13	東村山市	東村山第五中学校	塩 原 真 一	1	
14	稲城市	稲城第一中学校	橘 和 美	1	◎

◎ 分科会世話人

担当 教育庁指導部主任指導主事 竹 下 賢

「実践的コミュニケーション能力を育てる指導の在り方」

目 次

I	研究主題設定の理由と研究のねらい	2
II	研究の構想	2
III	第1分科会	
	研究主題「3年間を見通したコミュニケーション活動の在り方」	
	1 主題設定の背景と研究のねらい	3
	2 研究の方法	3
	3 研究の内容	3
	(1) つまづきの原因と解決のための方策	3
	(2) 3年間を見通した指導の在り方	5
	(3) 「言語の働き」に即した各学年の目標例	6
	(4) 活動例	6
	① 「誘う・依頼する」	6
	② 「情報を伝える・説明する」	8
	③ 「意見・苦情を言う」	10
IV	第2分科会	
	研究主題「実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるための評価の在り方」	
	1 主題設定の背景と研究のねらい	12
	2 研究の方法	12
	3 研究の内容	12
	(1) 実践的コミュニケーション能力とその指導について	12
	(2) 評価について	12
	(3) 実践的コミュニケーション能力をつけるための形成的評価	13
	(4) 実践事例	15
	4 今後の課題	17
V	第3分科会	
	研究主題「英語の指導を通じて、国際理解の資質を育む指導の在り方」	
	1 主題設定の理由と研究のねらい	18
	2 研究の内容	18
	(1) 国際理解の資質	18
	(2) 各学年の目標と学習活動の例	19
	(3) 授業の流れに即した活動例	19
	(4) 指導事例	20
	(5) これまでの実践の問題点と改善のための工夫	22
	(6) 研究の成果	23
	(7) 今後の指導の在り方	23
VI	研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由と研究のねらい

研究主題

実践的コミュニケーション能力を育てる指導のあり方

〈主題設定の理由〉

平成10年12月に新学習指導要領が告示され、外国語科が必修教科となり、「目標」の中で、実践的コミュニケーション能力の育成が改めて強調された。「実践的」というフレーズが加えられたのは、急速に進む国際化社会に即応できる力が今まで以上に求められていることの現れだと考える。

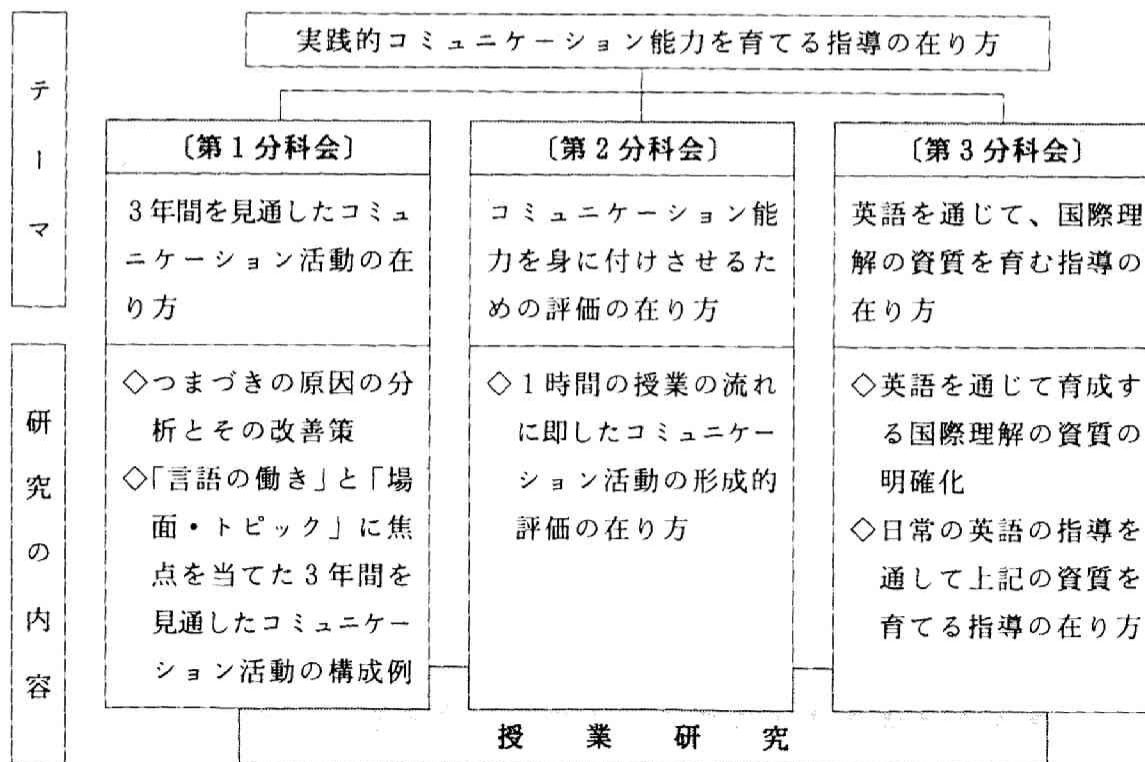
学校においては、ALTとのチームティーチングが拡大・充実する一方、姉妹都市との交流や国際理解をテーマにした活動など、生徒が様々な国の人々と直接触れ合う機会が増えている。そのような中において、英語で挨拶をしたり、自己紹介や学校紹介をしたりするなど、時と場に応じて、自分の考えを述べたり相手に質問したりすることが現実的に求められている。

〈研究のねらい〉

日常の授業を改善するための具体的な方策につながるものとして、上記のような文字通り実践的コミュニケーション能力を育むための指導の在り方をさぐることを研究のねらいとした。

研究を進めるに当たっては、① 3年間を見通したコミュニケーション活動の在り方、② 評価の在り方、③ 英語の指導を通じた国際理解の資質の育成、という観点から取り組んだ。

II 研究の構想



Ⅲ 第1分科会

研究主題

「3年間を見通したコミュニケーション活動の在り方」

1 主題設定の背景と研究のねらい

〈主題設定の背景〉

中学校入学当初はほとんどの生徒が英語の授業に興味、関心を抱いている。授業中に教科書を読んだり生徒同士で対話したりする声も大きく、英語の学習に対して意欲的であることが多い。ところが、学年が進むにつれて英語学習に対する興味・関心・意欲が薄れてくる生徒が目立ってくるということがしばしば見受けられる。その要因として、例えば、間違いを繰り返すことや試験の結果からくる自信の喪失とそれに伴う苦手意識の形成、個人の発達段階からくる尻込み、集団の雰囲気など様々なことが考えられる。それらの要因の中で個人の発達にかかわることや、生活習慣などの要因は別としても、できる限り入学当初の生徒たちの意欲を持続させるために、英語の授業で何が改善できるのかを改めて考える必要がある。

授業を計画する上で、1時間の授業単位で捉えられがちなコミュニケーション活動を3学年を通して関連付けることによって、生徒一人一人の学習の発達段階に応じた指導が容易になるとともに生徒の意欲を喚起し持続させることができるのではないかと考え、主題を設定した。

〈研究のねらい〉

「言語を通じて相手に何かを伝えようとする。相手を理解しようとする。」が、言語学習の大きな柱であるという考えのもとに、コミュニケーション活動を意欲的に行わせるための方策を見出すことを研究のねらいとした。研究を進めるに当たっては、特定の時間の授業においてだけでなく、日常の授業でこれらの方策や方法が継続的に行われ、学年がすすんでも活発なコミュニケーション活動が持続するという観点を重視した。

2 研究の方法

教科書の中から、コミュニケーション活動が中心になっている部分を抽出し、それを基に生徒が意欲を示さなくなる「つまづきの原因」を分析し、それを改善する方策を検討した。

3年間を見通してそれぞれのコミュニケーション活動を関連づけることができれば、生き生きとした活動を持続させることができるのではないかと考え、「言語の働き」と「場面・トピック」に注目して、その代表的なものの中から3年間を関連づける具体例を検討した。

3 研究の内容

(1) つまづきの原因と解決のための方策

「つまづきの原因」を①生徒の心理面、②授業の内容、③指導方法の三つに大きく分類し、それぞれについて解決の方策を考えた。その際、生徒の心理面については、授業環境の整備、生徒の人間関係改善など、英語の授業のみでは改善しにくい部分については考察しないことにした。

	つまづきの原因	解決のための方策及び課題
① 生徒の心理面	◇ 他人のことは比較的話しやすいが、自分のことは言いにくい。 (例えば、自分の「将来の夢」を人前で話すなど、日本ではあまり自分の意見を持ったり、それを表明したりすることが要求されないところがある。)	○人前で言いにくいことなどは、あらかじめビデオに収録して発表に使うなど、機器の利用も考えられる。 ○自分のことではなく、架空の人物になって考えを述べたり、第三者の紹介をしたりするといった工夫が考えられる。
② 授業の内容 容	ア) 場面・トピック ◇ 現実性(リアリティ)が乏しい。 (例えば、電話の場面で相手が目の前にいたりするなど) ◇ 生徒にとって身近な内容ではない。(戦争、飢餓など) イ) 言語材料 ◇ 表現が難しい。(語彙、意味内容、文の長さ、発音の難しさ) (例えば、How will the weather be next month?などは、beにこだわりついその説明をし過ぎる。 ◇ 不定詞、現在完了などは使うべき場面設定が難しい。 ◇ 語彙の量や表現の数が多し。	○リアリティを出すための環境づくりの工夫をする。 (例えば、電話の受話器などの小道具を用意したり、相手が見えないような工夫をしたりする。) ○生徒にとっては身近でないテーマについても、生徒の身近なことに関連付ける工夫をする。 (例えば、環境問題等は、教室の汚れや整備などの話題を入口にする。) ○生徒にとっては身近でなくても、将来出会う必然性の高い場面を考える。 ◇ 教えるべき言語材料や文法事項は省略できない。 ○ 生徒には、細かいところに目を向け過ぎず、まずは話せるようになることが大切であるという考え方を徹底する。ただし3年間で押さえておきたいところは考慮する。(別の場面で取り上げるよう見通しをもった計画が必要である。) ◇ 語彙の量や表現の数も無計画に減らすことはできない。 ○ 長い文をより短く簡潔な表現にしたり、分かりやすい単語に置き換えたりするなど、コミュニケーション活動に適したものにする。 ○ 生徒の発話を助けるために語彙や表現の例をいくつか提供して、選択して使えるようにする。

③ 指 導 方 法	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 場面の設定が不十分である。 ◇ 説明をし過ぎたり、逆に不十分であったりする。 ◇ 質問が抽象的で、生徒にとっては答えにくい質問がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ある表現が必然的に使われる場面にする。 ○② アとの関連で、不自然な状況を取り除く。 ○理解に留めるか、表現として使えるようにするか の区別をしながら指導する。 ○visual aidsを活用する。その際、見せるだけにするか、聞かせるだけにするか、説明を加えるかなど、それぞれのねらいや効果を吟味しながら活用する。 ○3年間の見通しの中で、説明を省略したり、他の活動と併せて行ったりする。 ○教師の読み方、声の大きさ、速さ、繰り返し、イントネーションなどによって、生徒の理解を助けることができる。 ○ワークシートを作成する際に、どこまで記入させるか、選択肢を与えるかなどを吟味する。挿絵や表の大きさによっても答え易さや重点項目の度合いを変えることができる。
-----------------------	---	---

(2) 3年間を見通した指導の在り方

上記のように、つまづきの現状を分析すると、言語材料はむやみに変えられないが、場面・トピックは工夫できることが分かった。

そこで、本分科会では、3年間で指導する場面・トピックを関連付けるとともに、それに基づいて3年間のコミュニケーション活動を系統だてることが大切であると考えた。

一方、例えば、「買い物」「道案内」といった特定の場面やトピックを3年間の見通しの中で関連付けて指導するにしても、いわゆる「おきまりの言い方」の学習だけでは、場面が変わっても通用するようなコミュニケーション能力とはならないと考えた。そこで、「言語の働き」に着目し、例えば、「依頼する」「意見を言う」というような「言語の働き」を縦軸にして場面・トピックを学年に応じて組み合わせるような指導を行うことが重要であると考えた。つまり、表現（フレーズ）そのものの学習をねらいとするのではなく、何ができるようになるかをねらいとして指導内容を考えることとした。

本分科会では、「言語の働き」の中から「誘う・依頼する」、「情報を伝える・説明する」、「意見・苦情を言う」を取り上げ、3年間での指導の構成を試みた。

(3) 「言語の働き」に即した各学年の目標例

	誘う・依頼する	情報を伝える・説明する	意見・苦情を言う
1年	○ 相手を誘うことができる 【友人同士の電話での対話】	○ 身の回りのことについて得た情報をそのまま伝えることができる。 【グループでの情報収集活動】	○ 二者択一程度の簡単な意思表示ができる。 【ファーストフード店での買い物】
2年	○ 理由をつけて誘ったり、それに対して理由をつけて応答できる。 【友人同士の放課後の対話】	○ 身の回りのことを自分の言葉で説明できる。 【日本的なものをを用いた Show & Tell】	○ 簡単な交渉を通じて自分の好みや要望などの意思表示ができる。 【店での買い物】
3年	○ 相手の反応に応じながら自分の考えを主張し、相手を納得させて誘う。 【友人同士、もしくは友人の親との電話での対話】	○ 必要な情報を収集し、整理してそれを伝えることができる。 【ALT への質問とその内容をもとにしたクイズ】	○ まとまった文を読み、それに対する自分の考えを持ち、それを発表することができる。 【意見・感想発表】

(4) 活動例

① 「誘う・依頼する」

1年	<p>目 標 「相手を誘うことができる。」</p> <p>場 面 「電話でのやりとり」</p> <p>言語材料 Let's....</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 電話での決まり文句の定着を図った上で、① <u>自分の言うべきポイントを相手に伝えることを第一の目標として活動を行わせる。</u></p> <p>○ 生徒の活動意欲はあるが、学習の初期の段階なので、文が長くないように留意する。② <u>単語での答えもよしとする。</u></p> <p>〈内 容〉</p> <p>○ ペアになった生徒 A、B に次のような指示を出して（状況設定をして）対話をさせる。（指示だけでは活動が困難な場合は、下記の活動例を提示してから対話をさせることもできる。）</p> <p>A あなたは GLAY の新しい CD を手に入れました。友達 の B さんに電話をかけ、明日あなたの家でその CD を一緒に聞くように誘いましょう。 （誘う内容は生徒に自由に考えさせることもできる。）</p> <p>B 友達 の A さんからの誘いに応えましょう。 （理由を付けて断らせることもできる。）</p>
----	---

1 年	<p>〈活動例〉</p> <p>B: Hello.</p> <p>A: Hello. This is (A). Can I speak to (B) ?</p> <p>B: Speaking, A.</p> <p>A: Oh, Hi, B. I have a GLAY's new CD. ① <u>Let's listen to it together tomorrow.</u></p> <p>B: ② <u>Sure.</u></p> <p>A: Please come to my house about one o'clock tomorrow.</p> <p>B: O.K. Good-by.</p> <p>A: Good-by.</p>
2 年	<p>目 標 「理由をつけて誘ったり、それに対して応えることができる。」</p> <p>場 面 「放課後のやりとり」</p> <p>言語材料 Will you...? I'm sorry, but...</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 英語を話すことに対する照れや恥ずかしさが出てくる。それを解消するためには、場面や人物の役作りを明確にし、生徒がその役になりきって対話するように指示する。</p> <p>〈内 容〉</p> <p>○ ペアになった生徒A、Bに名前を与え（生徒に考えさせるのもよい）、下記の状況設定により対話をさせる。</p> <p>A 新規オープンした店にBを誘って行きたいので、相手がのってくるような理由を考える。</p> <p>B 行きたくなければ、理由を付けて断わる。</p> <p>(例) A: Hi, B. Will you be free next Sunday? B: Well,... Why? A: T shop will open. I hear many basketball shoes will be on sale. B: Next Sunday? Oh, I'm sorry, but I have to help my mother next Sunday.</p>
3 年	<p>目 標 「相手の反応に応じて、誘うことができる。」</p> <p>場 面 「友達同士、友達の親との電話でのやりとり」</p> <p>言語材料 現在完了形</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 単なるロールプレイや既成の対話練習では、3年生の知的好奇心を満足させることは困難なので、対話の流れを生徒自身が工夫してつくり出すことができるようにする。</p> <p>〈内 容〉</p> <p>A あなたは、友達のBさんを映画に誘いたいと思っています。チケットが2枚あるので、断られても、なんとかして一緒に行くように説得しましょう。</p>

3 年	<p>B 友達のAさんから映画に誘われますが、あまり行く気はありません。相手の説得をうまくかわして断りましょう。</p> <p>C あなたはBさんの母親（父親）です。Aさんからの電話を受けたときに、相手がどういう人かをよく確認した上で、Bさんに電話を取りつぎましょう。</p> <p>※ 誘う側と誘われる側のどちらの方の発言がより優勢だったかを他の生徒に判定させるようなゲーム形式の活動にすることもできる。</p> <p>(例)</p> <p>B's mother: Hello.</p> <p>A: Hello. This is A speaking. Can I speak to B?</p> <p>B's mother: A? Who are you?</p> <p>A: I'm B's friend at school.</p> <p>B's mother: Oh, A! I'm sorry. Just a minute, please.</p> <p>A: Thank you.</p> <p>B: Hi, A.</p> <p>A: Hi, B. Have you finished your homework?</p> <p>B: Yes. Have you?</p> <p>A: Not yet. I went cycling today.</p> <p>B: That sounds good.</p> <p>A: Do you like cycling?</p> <p>B: Yes. I love it.</p> <p>A: Oh, you are lucky. I have two tickets for the movie "Messenger." Why don't you go with me tomorrow?</p> <p>B: I'm sorry, but I have to go to my uncle's house tomorrow.</p> <p>A: What time will you be back home?</p> <p>B: About three in the afternoon.</p> <p>A: Good! The movie starts at three thirty. So I'll go to your house around three. Let's go together.</p> <p>B: Well..., O.K.</p>
--------	--

② 「情報を伝える・説明する」

1 年	<p>目 標 「身の回りのことを伝える」</p> <p style="text-align: right;">活動の形態 グループワーク (フォーコーナー活動)</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 自分のことは言いにくいという問題点の解消を図るとともに、生徒の興味を喚起する観点から、他教科の先生について取材し、レポートする形態にする。</p>
--------	--

1 年	<p>〈 内 容 〉</p> <p>① 4人でグループを作り、各自が分担して他教科の先生について取材をする（ワークシートに記入する）。</p> <p>② 一人ずつ順番に得てきた情報を他の3人に伝える。他の3人はワークシートにそれを記入する。</p> <p>教室の四隅に次のような他教科の先生の紹介文を掲示する。</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p style="text-align: center;">似 顔 絵 Mr. Yamada</p> </div> <div style="margin-right: 20px;"> <p>Hi, I am Mr. Yamada. I am twenty-eight years old. I like soccer very much. I have a boy. He is two years old. He is very nice.</p> </div> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 5px;">name</td> <td style="width: 40px;"></td> <td style="width: 40px;"></td> <td style="width: 40px;"></td> <td style="width: 40px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">age</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">like</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">have</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> </div>	name					age					like					have				
name																					
age																					
like																					
have																					
2 年	<p>目 標 「身の回りのことを自分の言葉で伝える」</p> <p style="text-align: right;">活動の形態 Show & Tell, Questions & Answers</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 英語で表現する必然性を持たせるために、ALTに日本の文化について説明するという設定にする。</p> <p>○ 話し易くするとともに聞いている方の関心を引きつけるという観点から、Show & Tellにする。</p> <p>(例) 奴凧を持って説明する。</p> <p style="padding-left: 20px;"><u>Look at this.</u> <u>Do you know what this is?</u> <u>This is not</u> a doll. <u>It is not</u> a plane. <u>It is a flying kite.</u> <u>It is made of wood and paper.</u> In Japan</p> <p>※ 説明文のパターン（下線部分）を提示すると生徒は取組み易い。</p>																				
3 年	<p>目 標 「必要な情報を聞き出しそれを発表する」</p> <p style="text-align: right;">活動形態 グループ活動 Ordering words, Interview</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>○ 英語で表現する必然性を持たせるために、ALTに説明したり、質問したりする設定にする。</p> <p>○ 真のコミュニケーションにするために、生徒が本当に知りたいことを質問するようにする。</p> <p>○ slow learnersに配慮し、グループ活動にしたり、質問文例を提示したりする。</p>																				

3 年

〈 内 容 I 〉

① 4～6人のグループを作る。

② グループごとに、封筒に入った語を並べかえて質問文を作り、ALTに尋ねる。
(文が間違っていたら、ALTは答えない。)

※ 封筒には、以下のような文を単語ごとに切り離して入れておく。

(例) Do you have school uniforms? Do you have school lunch?
What sport is popular in your country?

〈 内 容 II 〉

① 自分たちが聞きたい質問を考え、ALTに質問する。

② 自分たちが得た情報をもとにクラスの他の生徒にクイズを出す。

(ALTへの質問例) (他の生徒へのクイズ例)

S: Excuse me. I have a question. Do they have school uniforms?
ALT: Sure. Go ahead, please. Do they have school lunch?
S: _____ 質 問 What sport is popular in his country?
ALT: _____ 答 え
S: Thank you very much.
ALT: You're welcome.

③ 「意見・苦情を言う」

1 年

目 標 「簡単な意思表示ができる」

場 面 アイスクリーム店での買い物
言語材料 want, or

〈活動構成のポイント・配慮事項〉

① 場面設定が不自然にならないように、身近で生徒の興味を引く場面にする。

② 短い表現を多く使えるようにする。

③ 選択肢を多く用意する。

※ 店は、寿司店、お弁当屋、ハンバーガーショップなどいろいろなものが考えられる。
班ごとに違う店を開き、交代で店側と客側に分かれて買い物をさせることもできる。

(例)

A: Next, please. A: (Single) or (double)?
B: I want (an ice cream), please. B: (Double), please. And (two colas),
A: What (flavor)? too.
B: (Vanilla), please. A: (Large) or (small)?
A: (Cup) or (corn) ?
B: (Cup), please.

2 年	<p>目 標 「簡単な交渉を通じて意思表示ができる。」</p> <p style="text-align: right;">場 面 店で父親のためのネクタイを買う 言語材料 Will you...? May I ...? How about...? look like</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>① 実際の買い物の場面で起こりがちな状況をつくる。 ② 品物が気に入らなかったらその旨をきちんと伝えるようにする。 ③ できるだけ短い文を使う。 ④ いろいろな交渉（色やデザイン、値段について）をするようにする。</p> <p>※ このような場面でよく使う表現集などを事前に提示することも考えられる。</p> <p>(例)</p> <p>生徒A（店員）：相手の希望を聞きながら、自分のすすめるものを買ってもらえるように説明する。</p> <p>生徒B（客）：店員にいろいろ聞きながら、贈る相手に似合うものを探す。</p> <p>A: May I help you? (値下げの交渉) B: Yes. I'm looking for a (tie). B: O.k. I'll take it. How much is it? A: For you? A: That's () dollars, please. B: No. For my father. B: Can you give me a discount? A: How about this one? A: Let's see. (あらかじめ許容範囲を決めておきその値段以上で売れるようにする。) B: Umm. It looks too (dark). A: O.K, then. How about this one? It's very popular this year. B: (気に入ったら買う。)</p>
3 年	<p>目 標 「自分の考えを持ち、それを発表することができる。」</p> <p style="text-align: right;">活動形態 グループ活動 (まとまった英文を読み自分の考えを出し合い、代表者がまとめて英語で発表する。)</p> <p>〈活動構成のポイント・配慮事項〉</p> <p>① 3年生の知的好奇心・関心に即したテーマを選定する。(例： Imagine (by John Lennon, Aesop's Fables, School uniforms, Convenience stores)) ② 話し合いを活発にするために、話し合いは日本語でもよいことにする。 ③ 発表は簡単な英語を使うようにする。</p>

IV 第2分科会

研究主題

「実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるための評価のあり方」

1 主題設定の背景と研究のねらい

本分科会の中では、はじめに、日常の授業実践で各自が不十分に感じている点を出し合い、それをまとめてみた。その概要は次のとおりである。

- (1) コミュニケーション活動ととらえているペア・ワーク、グループ・ワーク、スピーチ、スキットなどの評価がはっきりしないこと。
- (2) それらの活動が次につながるような系統的な活動になっていないこと。
- (3) 4技能の活動がばらばらに行われており、実践的なコミュニケーション能力にまでいたっていないということ。

これらをふまえ、実践的コミュニケーション能力を明らかにし、それを育成するための授業展開と評価方法を探ることを研究のねらいとした。

2 研究の方法

- (1) 実践的コミュニケーション能力と評価のあり方を文献などで調べる。
- (2) 実践的コミュニケーション能力を育成する授業展開（例）を考え、それに基づいて評価の方法を考える。
- (3) 実際に授業を実施する。
- (4) 事例の検証をもとに、「実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるための評価のあり方」を考え、まとめる。

3 研究内容

(1) 実践的コミュニケーション能力とその指導について

「実践的」とは、それぞれの場面、相手、目的などに応じてコミュニケーションを展開することができることであり、具体的には、海外旅行で買い物に困らない「英会話」から、ビジネスマンが英語で新製品のプレゼンテーションを行うなど、広範囲にわたって活用できる能力であると考えた。

さらに、相手に聞こえるくらいの声で発音すること、英語の表現を覚えること、文法を理解すること、自らすすんで学ぼうとする意欲をもつことを実践的コミュニケーション能力の基礎ととらえて指導を積み重ねることによって、生徒が、相手の意見を踏まえ、自分の考えを持ち、表現する力を身に付けさせることができると考えた。

(2) 評価について

評価には、診断的評価や形成的評価、総括的評価等、様々な形態や機能があるが、実践的コミュニケーション能力を育成するための評価の在り方を考えるに当たっては、生徒の

意欲を高め、学習の支援をするというねらいをもった形成的評価の考え方を基本にして研究をすすめることとした。その際、評価のスタイル（教師が生徒を評価する、生徒同士が評価する、生徒が自己評価する）についても併せて検討することとした。

(3) 実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるための評価

授業の流れの中でいつどのような評価を行うことが、生徒のコミュニケーション活動を充実させ、実践的コミュニケーション能力の育成につながるか、通常の授業の流れに即して以下のように考えた。

	ねらい	評価の観点	活動と評価の例
ウォームアップ	コミュニケーションへのレディネスの形成	<ul style="list-style-type: none"> 英語で話そうとする意欲があるか。 	<p>【あいさつ】</p> <p>How are you? に対して I'm fine. だけでなく、自分の実際の状態や気分をいろいろな表現を使って言えているかをみる。</p>
復習	基礎・基本の定着	<ul style="list-style-type: none"> 既習の言語材料について、声の大きさ、発音の仕方、意味の理解が十分か。 	<p>【リーディングマラソン】</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時の復習ページの音読をペアのパートナーに聞いてもらうことによる相互評価 一斉読みの最中に2～3名抽出して特に音声に焦点を当てた教師による評価 <p>【ペアリーディング】</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアの内一人は、本文を read & look up で読み、他の一人は、読まれた文の最後の単語を繰り返す、あるいは相槌を打ち、1頁が終わったら、聞き手は相手への評価を英語で伝える。 教師は、毎回2～3名抽出して、つなぎ言葉、相槌の使用が自然な形に近づいているか評価する。 <p>【リスニングクイズ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師が、前時の復習ページを生徒の身近な内容に変え、ジェスチャーを交えながら演じ・話す英語を聞いて、後の質問に答える。生徒の挙手等によって理解度を評価する。

導 入	基礎的・基本的な 内容の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・新出の言語材料が理解され、適切な大きさの声で表現されているか。 	<p>【ペアワーク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に身近な題材で新出の言語材料を使い、インフォメーションギャップやインタビューゲームを行う。「つなぎ言葉」を使うことを奨励する。活動の後、基本文を理解したか、「つなぎ言葉」を使用したかについて自己評価をする。
展 開	基礎的・基本的な 事項を実際に使用する経験	<ul style="list-style-type: none"> ・一連の活動の中で、新出の言語材料を使って、自分の意見などを言うことができる。 	<p>【グループワーク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアワークで使った基本文を用いて自分の考えを英語で発表する。 ・基本文を使って自分の考えや思いを発表できたか自己評価をする。 ・聞く側は、発表の方法はどうであったか、よく分かったかを評価する。 <p>【スピーチ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者は、既習の言語材料を使い、本課の題材に関連して自分のことや自分の考えを発表する。 ・聞く側は、質問をしたり、感想をのべたりするなど、評価するような表現を使うようにする。 ・発表者は、自分の考えを言えたか自己評価をする。 ・聞く側は、発表内容を理解し、質問ができたか、感想を述べたかなど、自己評価する。 ・スピーチの内容・発表の態度について相互評価をする。 <p>【スキット】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習の言語材料を使い自分たちの考えにより（又は教科書をもとに改作）スキットを作り発表する。 ・評価は上記スピーチと同様
ま と め	生徒の個人内評価によるコミュニケーション活動への一層の意欲喚起	【自己評価活動】	

実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるためには、生徒の学習に対する意欲を高めること、また、そのための支援を1時間の授業の中で適宜行うことが重要であるという考えのもとに具体的な評価の在り方を示したのが上記である。

日々の授業におけるこのような評価活動が、生徒の実践的コミュニケーション能力を高めるために機能するためには、以下のような配慮や工夫が併せて重要であると考えられる。

① その年度、学期、単元のはじめに、何を学ぶのか、目標は何かを生徒に明確に知らせる。

自分の目標を考えさせることにより、生徒一人一人が自ら考え、自ら取り組む姿勢が生まれると考える。

② 心情面・態度面を重視した教材を選び、授業展開の工夫をする。

例えば、教科の内容を生徒の身近な状況に置き換えたり、教師自身の体験を語るなど、生徒にとって魅力ある教材を提示することに心掛ける必要がある。また、あらゆる場面で生徒をほめることを心掛け、そのほめ言葉も多くのバリエーションをもちたいものである。

(4) 実践事例

① 指導計画

(1)	UNIT 5	全体把握	…	1 h
(2)		Starting Out (P 40~41)	…	1 h
(3)		Listen and Speak (P 43)	…	1 h (本時)
(4)		Read and think ① (P 44)	…	1 h
(5)		Read and think ② (P 44)	…	1 h
(6)	UNIT 5	のまとめと選択活動	…	2 h
(7)		選択活動の発表	…	1 h

② 単元の目標

世界には苦しい状況の中でもがんばって生きている子どもたちがたくさんいる。その現実を理解させるとともに、彼らのために何ができるかを考え、不定詞を含む英語で表現させる。そして、生徒の個性や興味・関心に応じて、いくつかの形態（劇発表、ポスター作成、ピースレター）から自由に選択させ、自分の考えを発表させる。

③ 本時の目標

- (1) want to ~ の文を理解し、言ったり書いたりすることができる。
- (2) want to ~ を使って、世界の子供に対しての自分の考えを表わすことができる。

④ 本時の指導過程

() 内は時間 (分)

	指 導 項 目	指 導 内 容	評 価 の 観 点
ウォームアップ	1. Greeting (2)	T : Good afternoon, everyone. S : Good afternoon, Ms.Tamaki. T : How are you? S : I'm fine. など	a. 意欲 (「自分の言葉」で挨拶をしているか)
	2. Singing a song (3)	UNIT 5 のうた 'All you need is love' を歌う。	
復習	3. Review of the last lesson (3)	・前時の新出単語の復習 ・本文の音読 ・基本文の暗唱	
	4. Reading marathon (5)	ペアになり、発表させる。	b. 発音 (英語らしい発音か) c. 声の大きさ (相手に聞こえる声か)
	5. Listening quiz (3)	本文から発展した英文を聞き取らせる。	d. 表現力 (内容を考えて読んでいるか) a. 意欲 (顔をあげて聞いているか) c. 理解力 (全問正解できたか)
導入	6. Oral introduction of the new material (3)	want to ~ を使って身近なことについて聞かせる。	c. 声の大きさ (相手に聞こえる声か) d. 表現力 (内容を伝えようとしているか)
	7. Pair work (5)	S 1 : Do you want to stop the war ? S 2 : Yes, I do.	c. 理解力 (相手の言う英語を聞き取れたか)
展開	8. Textbook (10)	・本文のオーラルイントロダクションを行う。 ・新出単語の導入 ・CDを聞く。 ・本文の音読練習 ・TFテスト ・板書をノートに写させる。	a. 意欲 (積極的に辞書などを使って取り組んでいるか) f. 思考力 (自分の考えをまとめられるか)
	9. Group work (13)	・世界の子供たちのためにしたいことを話し合い、自分の考えを want to ~ を使って書かせる。 ・数名の生徒に発表させる。	e. 理解力 (want to の文を理解しているか) e. 声の大きさ (皆に聞こえる声か) d. 表現力 (自分の意見を正しく伝えるか)

ま と め	10. Consolidation	• Exercise をやらせる。	a. 意欲（自己評価し、次の学習の目標を立てているか）
	11. Greeting (1)	• 本時の活動をふりかえり、自己評価させる。 • 次回の予告、家庭学習の指示	

- 評価 (1) want to ～ の文を理解し、言ったり書いたりすることができたか。
- (2) want to ～ の文を使って、世界の子供たちに対しての自分の考えを表わすことができたか。

4. 今後の課題

- (1) 授業の最後の自己評価は、生徒の個人内の変化を見るものであるが、自ら考え、自ら学ぶ姿勢を養う効果がある。今後はそれに加えて、友人の変化を見つけ、お互いの変化を認め合う相互評価を取り入れるのもよい。ペアワークやグループワークでよく活動していた人を認めたり、授業全体をとおして意欲的に参加していた人を考える時間をとる。それを発表することによって、また自分に対する自己評価も変わってくると考える。
- (2) この分科会では、実践的コミュニケーション能力をつけるために、主に1時間の授業を単位としての評価について考えてきた。ひとつひとつの授業の積み重ねの上に、定期テストがある。定期テストの中でも、基礎・基本を大切にしながら、実践的コミュニケーション能力を評価する問題を考えていきたい。
- (3) いままで形成的評価を中心に考えてきたが、定期テストやその他の活動が総合された評価（総括的評価）にも目を向けたい。子供を伸ばすための評価と、客観性のある評価のバランスを考えていくことが課題である。

V 第3分科会

研究主題

「英語を通じて、国際理解の資質を育む指導のあり方」

1 主題設定の理由と研究のねらい

〈主題設定の理由〉

21世紀を迎える今、インターネット等の普及により、国際化・情報化が進む一方、環境や資源などをはじめとする地球的課題の解決も急を要している。こうした問題の解決には、国籍などの差異を越え、互いを理解・尊重し合う資質の育成とともに、意思疎通の手段としての語学力の向上が求められている。

また、平成14年度から完全実施となる新学習指導要領による「総合的な学習の時間」の創設に伴い、小・中学校における国際理解教育のあり方も様々に検討されている。

〈研究のねらい〉

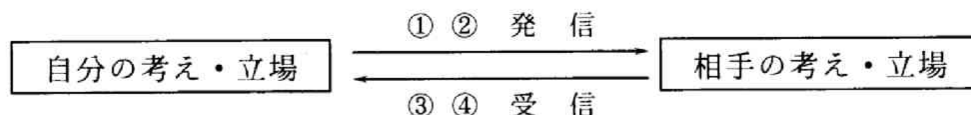
本分科会では、英語科としての国際理解教育の進め方について、「自らの考えを持ち、それを相手に伝え、同時に相手の意向や考えを受け入れる」資質や能力・態度を英語を通じて育む観点から指導の在り方を探ることを研究のねらいとした。

2 研究の内容

(1) 国際理解の資質

本分科会では、「国際理解の資質」を以下のようにとらえた。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ① 自分の考えを持つこと。 | ② 自分の考えを表現すること。 |
| ③ 相手の考えを理解すること。 | ④ 相手の考えを尊重すること。 |



この場合、① ② は自分の考えや立場を相手に伝えていく発信型の資質である。それに対して ③ ④ は相手の考えや立場を自分で理解・尊重していく受信型の資質である。また、このことに関連して、現行の学習指導要領における「国際理解」について「世界の国々や人々はそれぞれ独自の文化を持つことを理解し、偏見なく正しく日本の文化と外国の文化を認めることである。その際大切なことは、外国のことを受け身的に理解するだけでなく、日本の文化や日本人の考え方等を外国の人々に積極的に伝え、理解を得ることである。」という解説がされている。そこで、③ ④の受信型の資質の向上も念頭に置きながら、主に ① ② の発信型の資質を育む指導に重点を置いて研究することとし、以下のような仮説を立てた。

【研究の仮説】

相手の考えを理解・尊重しつつ、生徒に自らの考えを述べる機会を多く設定すれば、国際理解の資質を育むことができる。

(2) 各学年の目標と学習活動の例

前述の仮説を検証するにあたり、学年ごとの目標や具体例を以下のように設定した。

〈1年次〉「身近な話題に関して、自分の気持ちや考えを交えて簡単な英語で表現できる。」

(例) 自己紹介のスピーチ、教科書をモデルにしたプラスワンダイアログ、ゲーム、文法項目の定着をねらった様々なペアワーク

〈2年次〉「事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容を相手に伝えるよう努力する。」

(例) テーマに基づくオリジナルのスピーチ、オリジナルのスキット、身近な話題についての1・2分間トーク、トピックカードを用いた意見交換

〈3年次〉「広い視野から自分の考えや意見を筋道を立てて述べるよう努力する。」

(例) ミニテーマに基づく即興スピーチ、ミニディベート、Show & Tell

(3) 授業の流れに即した活動例

上記の仮説の中でも、特に、「生徒に自らの考えを述べる機会を多く与える。」ことが重要であると考え、日常の授業の中における具体的場面でどのような活動が目標を達成するためにふさわしいものであるか具体的な活動を考察した。

場 面	具 体 的 な 活 動 例
挨拶	・月日、曜日、天候、生徒の様子、昨日の出来事、好きなテレビ番組・歌手等についての質疑応答
ウォームアップ	ALT (JTE) への質問、スピーチ、スキット、宿題の発表、インタビューゲーム、Show & Tell
導入、展開の場面	・導入の際の生徒への問いかけ (インタラクション) ・ペアワーク (インフォメーションギャップ、インタビュー等) ・グループワーク (トピックに基づく意見交換、クイズ作り、フォーコーナー活動等)
まとめ (発展)	・学習したレッスンについての感想を英語で述べる。 ・レッスンの話題についての意見交換 ・レッスン内容に関わる異文化の調査結果を英語で報告 ・レッスンの内容からヒントを得たオリジナルスキットの発表

このような指導をする際に、以下のことが重要であると考えた。

- ① 聞いている相手分かる、あるいは分かり易い英文によって、自分の考えや気持ちを伝えるようにすることが大切であることを指導する。
- ② 会話をスムーズにするために、次のような「つなぎ表現」を使えるように日常的に指導する。

I see. / Pardon? / Really? / That's right. / Of course. / I think so. / Let me see. / How about you? / By the way, / What do you think? / 他多数

- ③ 上記 ③ ④ の受信型の資質を育むためには、聞く側の態度についての指導も重要である。そのために以下のような態度を育てることに配慮する。

うなずく。 メモをとる。 質問する。 相手の言ったことを繰り返す。
感想を述べる。 相手の良い点を誉める。 拍手する。

このような基礎的なことを日常の授業の中で繰り返していけば、相手の考えや立場を理解し尊重する資質が育まれ、国際理解の資質（より高度な相手の尊重）へとつながっていくと考える。

(4) 指導事例

① 指導のねらい

- ・国際理解の基礎的な資質を養う。
- ・中国・韓国・朝鮮のことを知り、国際理解や交流への未来志向的な態度を培う。

② 指導計画

第1時：Unit 6 Starting out (have to ～ の使い方に慣れさせる。)

第2時：Unit 6 Starting out (新出単語・本文の内容理解)

第3時：Unit 6 Our Neighbors ① (未来形 will の使い方に慣れさせる。)

第4時：Unit 6 Our Neighbors ① (新出単語・本文の内容理解)

第5時：Unit 6 Our Neighbors ② (助動詞 must 新出単語・本文の内容理解)

第6時：Unit 6 Our Neighbors ③ (新出単語・本文の内容理解 Unit のまとめ)

③ 本時の指導目標

- ア 自分の意見を今持っている英語力で相手に分かりやすく表現する。
- イ 新出単語・その他の単語の意味を理解し使う。
- ウ 本文の内容を理解するとともに have to を使って表現する。

④ 本時の指導計画

	指導項目	教師の指導	生徒の活動	指導上の留意点
導 入	あいさつ及び簡単な会話	How are you?	I'm fine. Not so bad. など	How are you? に対する答えが単調にならないように注意を促す。
	Warm up (1) 意見の発表	You like Japan. Why ~ ?	自分の考えを英語で表現する。	独自の意見が言いやすいように、文法的ミスは原則として指摘しない。
	(2) Who am I? クイズ	5～6名の生徒を指名	日本・世界の名所旧跡や有名なものについて3つのヒントからなるクイズを出題 (5～6名)	聞き手が理解しやすいような簡単な表現・単語を使うようにする。どうしても難しい英単語を使う時は日本語で補足説明をする。

展 開	新出単語の学習	フラッシュカードを用いて発音練習と意味の確認をする。	発音練習・意味の確認 単語・意味等をノートに記入する。 記入後、再度発音、同時に暗記をする。	会話の中でも自信をもって使えるよう、十分に発音練習を行う。 日本語→英語への変換についても練習を繰り返し、会話の際に使える状態にまで定着させる。
	本文の内容理解	Oral introduction	要点を聞き取る。	細部にはこだわらず要点を聞き取るようにさせる。
	音読練習	音読練習	音読練習 Choral reading Individual reading	スピードやリズムに対する注意を促す。
	Q and A	本文に関する英問英答を行い本文の理解度を確認する。	教師の質問に答える。	short answer でも long answer でもよしとし、相手の発問に対する応答が自然な流れになるように注意を喚起する。
	言語活動	ペアワークで have to ～ を活用する練習をする。 活動の内容・手順 ・自分の家庭で「～しなければならない」ことについて3つ以上英作文し、その後ペアでそれをインタビューしあう。 What do you have to do in your house? → I have to ～.		相手の発問をよく聞き、それに対して、自分の状況を分かりやすく英文にまとめさせる。 理由を聞いたり、答えたりする展開にするとより望ましい。
	本文の暗唱	本文の暗唱を指示し、本時の定着をはかる。	本文の暗唱 1分間の暗唱時間後、ペアでそれを確認し合い、その後全体で発表する。	相手によく聞こえるように大きな声で、明瞭に音読するように心掛けさせる。
まとめ	宿題の提示	ノート整理・ワークブックの指示		
	あいさつ	あいさつ	あいさつ	アイコンタクトに留意させる。

⑤ 評価の観点

- ア 各生徒が自分の意見を、文法的なミス等を恐れずに表現できたか。
- イ 相手の英語を聞き、その内容を理解しようとする姿勢をもって聞くことができたか。
- ウ 音声表現の機会を生徒に多く持たせることができたか。

⑥ 実際の授業の考察（参観者の観察・感想から）

- ア いろいろなもの（国・人・事柄等）に対して、その良い所を捜し出すような姿勢・考え方を育成しようとしている。
- イ 生徒によっては、聞き手が理解しやすいような単語や文を使い、聞き手の英語力も考え、表現の中にそのような配慮をしている様子が伺える。
- ウ 生徒が英語を使って表現する機会をなるべく多くとるように、授業全体の流れを計画・実施している様子が伺える。
- エ 生徒が、自分の意思を英語で伝えることのできる喜びを感じられるように、教師は、誉めることを重視して授業をすすめている様子が伺える。
- オ 話し手が用いる英語そのもの（文法や単語の使い方等）に関心を向けるのではなく、話し手の言おうとすることを、推測したりして理解しようとする姿勢を育成していきたい。

(5) これまでの実践の問題点と改善のための工夫

問 題 点	改 善 の た め の 工 夫
ア 生徒の応答がパターン化する傾向がある。	複数の応答例を示すとともに、同じ表現は使わないとかワンセンテンスを必ず付け加えるなどのルールを設ける。
イ YES、NO での単調な答えが多い。	文で答えさせると同時に、繰り返しやプラスワンの表現を付け加えることをルールにする。
ウ 話題によってペアワーク（グループワーク）が盛り上がりがない。	単純なビンゴ（クイズ）形式にする。 1分以内に何人と会話できたかなどの時間制限を設け、会話できた人数（質問回数）を競い合わせる。 インタビューゲームの際にJTE（ALT）との会話をさせる。
エ お互いの意見を交換する場面においては、特に、会話の「つなぎ言葉」が使えるようにしないと、会話にならず、一方的な発言になる。	「つなぎ言葉」をリストアップし、ウォームアップの段階で繰り返し練習させたりして定着を図り、生徒が意識的に会話の中で使うようにすすめる。

(6) 研究の成果

ア 発表の機会を増やしたことにより、生徒が、自分のことについて表現することに慣れてきた。簡単なことからは瞬時に、少し複雑なことでも少し時間をかければなんとか表現できるようになりつつある。

イ 他の生徒の発表を以前よりもよく聴くようになり、発表者が間違えたりする場面においても以前のように笑ったりすることは減り、相手を認めようとする姿勢が見えてきた。

ウ 上記イのことながら、発表する場面でも生かされ、失敗を恐れなくてクラス全員の前で自分の考えを述べようとする雰囲気になってきた。

これは、先に述べた発信型の資質と受信型の資質の育成が相乗効果をもたらしていることを具体的に現しているものだと考える。

(7) 今後の指導の在り方

上記の研究の成果等を踏まえ、今後、指導をすすめるに当たっては、以下の点を重視して計画を立て、実践することが大切だと考える。

ア 生徒が自らの考えを述べるような機会を毎時間意図的に盛り込む。

(クラスルームイングリッシュの多用はもちろん、生徒同士の活動として、ペア、グループ、ランダム等、様々な形態により、英語での発話の量を増やす工夫をする。)

イ 音読やパターンプラクティス等を積極的に活用し、基礎的・基本的な内容の定着を図る。

(自らの考えを述べる機会を設定したとしても、生徒がそれを表現する術を知らなければ、相手とのコミュニケーションは成立しがたい。その術とは、相手とのコミュニケーションに必要な最小限度の文法や場面に応じた特定の表現、言い回しであり、これらを効果的な繰り返しなどで、自然に身に付けさせるようにする。)

ウ 話しやすい環境作りと自己を表現する自信をつけさせる。

(生徒が意見や考えを持っていても、それを表現しがたい雰囲気や環境の中では、生き生きとしたコミュニケーションは生まれにくい。日頃からお互いを理解し、尊重する雰囲気作りを教師が進んでしなければならない。また、ALTとの会話を通して、自分の英語が実際の言葉として通じる喜びを味わわせたり、生徒同士の会話練習を通じて自己を表現する自信をつけさせることが重要である。)

エ 身近な場面を設定し、日常的な言語活動の演出に心がける。

(コミュニケーション活動と称して行なわせるペアワーク等は、とにかく活動のための活動になりがちである。活動の場面をできるだけ実際の場面のように設定し、真のコミュニケーションに近づけるようにすることが大切である。)

オ 英語を通じて国際理解の資質を育むことを意図的に行う。

(教師は、多忙な日常生活でとくに教科書を消化することやペアワークのハンドアウトの作成などに終始することがある。しかし、生徒の自己確立を促したり、相手の考えを理解し尊重する姿勢を英語を通じて育成することに留意しながら指導計画を立て・実践することも重要である。)

Ⅵ まとめと今後の課題

現代の国際化社会に対応できる、生徒の実践的コミュニケーション能力を育てるには、どのような指導をしていったらよいかということが、本研究部会の主題である。その研究を進めるために、三つの分科会に分かれて研究を進めた。

第1分科会では、どのようにすれば、生徒が3年間活発にコミュニケーション活動を行っていくかを研究した。生徒が徐々に活発さを失っていく要因として、様々な「つまずき」が挙げられる。それらを、「心理面」、「授業内容」、「指導法」の三つに分類した。心理面については、生徒の発達段階により乗り越えるのが困難な壁はあるが、題材の興味深さや指導方法で対処できることも多いと考えた。授業内容については、場面やトピックを工夫し、なるべく難しい表現は避け、説明のし過ぎや不足をなくし、「将来の夢」などといった、まだ生徒の考えが固まっていないと思われるようなものや抽象的な題材は避けることなどを考えた。指導法については、表現の丸暗記だけに終わっている指導を見直し、機転を利かせるなど、生徒が自分なりに考えて対処しなければならないような状況をつくることについて検討した。

第2分科会では、「実践的」とは、それぞれの場面・相手・目的などに応じてコミュニケーションを展開することと考え、広範囲にわたって活動できる能力を育成する方法を研究した。授業では、相手に聞こえるくらい声を出させること、使える表現を覚えさせること、文法についての理解を深めさせること、知的好奇心を高めさせることが必要と考えた。そのための評価として、それぞれの学習目標を達成するために、適宜助言・指導をする形成的評価が望ましいと考えた。その一例として、意欲、発音、声の大きさ、表現力、理解力、思考力を評価の観点とした指導事例を作成した。

第3分科会では、国際理解教育に対する、英語科としての役割を明確にすることを柱とした。そして「相手の考え、立場を理解・尊重しつつ自分の考えを述べる機会を多く設定すれば、国際理解の基礎的資質を育むことができる。」という仮説を立て、その中でも特に、「生徒に自らの考えを述べる機会を多く与えること」が重要であると考えた。このことを、日常の授業の挨拶、ウォームアップ、導入・展開場面、まとめの場面で実際に行うための具体的な活動例を考えた。

以上のように本研究会では、三つの分科会に分かれて研究に取り組んだ。今後の課題としては、生徒の「つまずき」の分析と対策にもっと研究の余地があること、自己評価に加えて相互評価を加えること、定期テストの中にも実践的コミュニケーション能力を評価する問題を入れること、生徒を伸ばすための評価と客観性のある評価のバランスを考え、総括的評価も研究すること、自分の考えを述べる機会を毎時間設定すること、自分の考えを述べるのに必要な基礎・基本を定着させること、発言しやすい雰囲気を作ること、生徒にとって身近な題材や言語材料であること、などである。4技能のバランスをとり、3年間生き生きとコミュニケーション活動に取り組ませるための指導の在り方について、今後も研究が必要である。